

# 発音と音声のしくみに焦点をあてた中学校英語教科書分析

－インプットの基礎を考察する－

上田 洋子・大塚 朝美

## **An Analysis of Pronunciation Instruction in Japanese Junior High School English Textbooks: Indications from the Early Stage of Input**

Hiroko Ueda, Tomomi Otsuka

### 抄 録

本稿は、平成17年度検定済の中学校英語検定教科書における発音を中心とした音声指導項目に焦点をあて、発音記号、強勢、イントネーション、単語間の音のつながり（連結・脱落・同化）、ポーズ（意味グループごとの区切り）、OI（音声表現）指導の6項目を整理し、それらの提示内容や提示方法を分析した。

結果は、6社の検定教科書が発音・音声のしくみを各項目に渡り提示し、英語音声学の基本的な指導材料を一見示しているかのように見えながらも、各社の音声指導項目の扱い方による大きな差異が明確になった。どの教科書を使用したかによる学習者への影響が大きいことが指摘される。

**キーワード：**中学校英語検定教科書分析、発音指導、音声指導項目

(2010年10月1日受理)

### **Abstract**

The purpose of this research was to examine variations in pronunciation instruction currently included in Japanese junior high school English textbooks. Six English textbook series were analyzed in terms of how they treat six categories of phonetically related items: phonetic alphabets, stress, intonation, connected speech, identifying thought groups, and oral interpretation. The research found that each textbook provides some coverage of these categories, with explanations of phonetics theory. However, because each textbook's emphasis is different, the learners' acquisition of pronunciation and phonetic knowledge is likely to vary greatly.

**Key words:** junior high school, English textbooks, pronunciation instruction, phonetically related items

(Received October 1, 2010)

## 1. はじめに

大学の英語音声学の授業を担当し、学生の発音指導に10年以上携わる中で、学生たちはどのような英語の音声学習を経て大学に入学してきたのだろうか、ということをついも気にかけてきた。「音声学」という科目は皆が同じスタート地点に立つ新しい科目だと説明するが、果たして本当にそうなのだろうか。日々の授業で音声理論を教えていると、平成22年度は特に「このような理論をもとにした発音練習を中高の授業でも行ないました」という学生の声を多く耳にする。そこで、大学入学以前の英語音声学習履歴を一度系統立てて調査することにより、学生の音声学習の実態を知り、大学でのよりよい音声指導につなげられるのではと考えた。

実態調査の手法としては1) 経験則をもとにしたもの、2) 教員・学生へのアンケート調査、3) 教科書分析、4) 授業観察・分析(短期・中期・長期)、5) シラバス分析などがあげられている(田邊、中野、1999)が、本稿ではこのうち3)を用い、平成22年度現在使用されている中学校の英語検定教科書6社について、音声指導項目(主に発音に関するもの)を分類し分析した。中学校では新学習指導要領が平成24年度より施行されるため、現行の教科書(平成17年度検定)も間もなく使われなくなるが、今後大学英語教育の現場では、現行の教科書を使用した学生を、現役入学ならば平成22年度から29年度まで迎え続けることになる。よって、現行の教科書分析結果により、平成29年度までの数年間、大学の新生が入門期に受けてきたインプットの基礎が把握でき、大学英語音声教育の実践に役立てることができよう。そこで本稿では、中学校英語教科書中に記載されている音声指導項目を発音記号、強勢、イントネーション、単語間の音のつながり(連結・脱落・同化)、ポーズ(意味グループごとの区切り)、Oral Interpretation(音声表現)指導の6項目について分析し、考察した。

## 2. 研究の目的と背景

本稿の研究目的は、英語学習のインプットの基礎となる中学校教科書の音声指導項目分析から、そのアプローチの差異を考察することである。中学・高校英語検定教科書分析の先行研究例をみると、研究テーマはコミュニケーション(後藤、1997; 金田、2005; 林、2010)、語彙(甲斐、2004; 及川、2007; 中條、西垣、長谷川、内山、2008)、文法(小関、2001)、音声指導(日吉、1998; 中岡、1998; 田邊、小山、中野、1998; 山本、1998; 小川、1999、2002)に大別できるであろう。音声指導の分野について興味深いのは、一改訂前の検定教科書の分析は盛んに行われているが、現行の教科書が登場した2006年以降は、あまり焦点が当てられていないことである。その理由として考えられるのは、それらに含まれる音声指導項目が以前と比べ格段に増加しているということではないだろうか。教科書各社の「発音指導のコナー」が一様に増え、「音声指導が不十分である」という研究成果や考察を導く必要がなくなったのかもしれない。音声指導項目の不足を指摘するよりも

しろ、その「指導実態はどうなっているのか」といった調査研究に視点がシフトしていったとも考えられる（浅野、2007; 大学英語教育学会実態調査委員会、2007; 菊池、2007、2009、2010; 中西、2008a、2008b; 柴田、横山、多良、2006、2008; 多良、大嶋、2010）。

そこで本稿では、ここ数年ほとんど取り上げられていない中学校教科書の音声指導項目に注目し、かなりの数とバリエーションがある「発音指導のコーナー」や音声指導関連部分を全ての教科書において分類し、考察した。それぞれの教科書は様々な名称やアイコンを用いて音声指導項目を示しているが、共通の用語や表現が使われているわけではなく、それらの分類は極めて困難であった。そのため、分類・分析にあたっては、できるだけシンプルに結果が提示できるように心がけた。なお、分析を行ったのは生徒用の教科書のみで、教員用のマニュアルや付属のCDは含んでいない。

### 3. データの収集と分析方法

分析対象としたのは、平成 22 年度に全国で使用されている平成 17 年度検定済の中学英語教科書 6 種類、すなわち New Horizon (以下 NH)、New Crown (NC)、Sunshine (SS)、Total English (TE)、One World (OW)、Columbus 21 (C21) の各 3 学年分、合計 18 冊である<sup>1</sup>。本稿では、各教科書の英語の音声・発音のしくみの提示を行っている部分や独立したコーナーなどを全てチェックし、以下の 6 項目について分析した。ただし、1) と 2) については教科書全体を分析対象とした。

- 1) 発音記号
- 2) 強勢
- 3) イントネーション
- 4) 単語間の音のつながり（連結・脱落・同化）
- 5) ポーズ（意味グループごとの区切り）
- 6) Oral Interpretation（音声表現）指導

なお、本稿でいう「発音指導のコーナー」とは、英語のつづりや発音記号を示して発音練習を促したり、音声のしくみについての解説やそのための練習の機会を提供したりするコーナー、そして時にはリスニングやスピーキングと関連させて発音を意識させるようなコーナーをいう（以下「発音コーナー」）。このようなコーナーは、教科書のレッスンやユニットごとに一定の間隔で配置されているもの、または巻頭や巻末に特集されているものなど様々であるが、各教科書の全コーナーをまとめたのが表 1 である。表 1 が示す通り、各社ともそれぞれ独自の工夫を凝らした「発音コーナー」を設定している。様々なコーナー名やアイコンについては、目次などにそれらが何を目的として設定されているかが記載されている。

<sup>1</sup> 本稿中の分析を通してこの記載順を守るが、これは『内外教育』（2009）により発表された 2010 年度の採択率順である。

表 1 発音コーナー

教科書	場所	学年	コーナー名・アイコンとその説明 (矢印後ろの説明は教科書にある記載と同じ)
NH	本課	1-3 共通 1のみ	“Sound Box” → 発音練習のコーナー “Tool Box” → 活動に役立つ単語・表現集 “Multi Plus” → 自己表現のための総合的活動 「基本文」の「基本練習」
	欄外	1-3 共通	★印、『対話のテクニック』
	巻末	1のみ	【i e a o uの読み方の基本ルール】
NC	本課	1-3 共通	“Sounds” → 音声について学習します “Word Corner” → いろいろな単語をまとめて学習します
	欄外	1-3 共通	☺印 → 発音をするときに注意する点を示しています
	巻末	3のみ	【リズム読み】
SS	巻頭	1のみ	“Let's Start”の「アルファベットが表す音を聞いてみよう」
	本課	1-3 共通	【発音に注意しよう】
	欄外	1-3 共通	◆印
	巻末	1、2のみ	【英語の音声】
TE	本課	1-3 共通	“Listening” → 英語を聞き取り、問題に答える活動です “Sound Corner” → 英語のリズムやイントネーション、語がつながって起こる音の変化に慣れるための活動です
	欄外	1-3 共通	★ New → 新しく学習する単語です 📖印 → そのセクションを理解するうえで、知っておくとよい語句です 🗣️印 → コミュニケーション能力を高めるためのアドバイスです “In Your Words” → 自己表現のコーナーです
		1、2のみ	■印 → 欄外の発音とつづり (■はさらに色分けされており、1年次は有声音と無声音の子音、2年次は母音と有声音の子音に分けられている)
	巻末	1のみ	“Check It Out”「語形変化のまとめ」 → Lesson や Action! で学んだ目標文などをまとめて、わかりやすく解説しています(名詞の複数形、3単現のs、動詞の過去形の発音が記号で示されている。)
OW	巻頭	1のみ	“Starting Point 2” (A-Zのアルファベットから始まる単語の音に注意させる。)
	本課	1-3 共通	各 Unit 最初のページの10 GOALS、“Activity” “CHANTS” → チャンツ(音とリズム)
	欄外	1-3 共通	●印 → つづり字と発音、文法の注意事項
C21	本課	1-3 共通	⑤印 → 英語を声に出して言う活動 🔊印 → 発音のポイント
	巻末	1-3 共通	【発音のポイント】

(注) Lesson/Unit などの教科書の中核部分を「本課」と表した

## 4. 分析結果

### 4.1 発音記号

#### 4.1.1 発音記号の種類

ここでは発音指導の手がかりとして、どのような種類の発音記号が各教科書において提示されているかについて述べる。

まず、本稿では、少ない記号で効率良く発音を表記し、教育表記としての実用性が認められている表記法<sup>2</sup>を用い、各教科書で使用される母音・子音を22の母音(表2-1)と24の子音(表2-2)に分類した。この分類にあたっては、一改訂前の教科書を分析した小川の研究(小川、2002)においても既に明らかにされているように、各教科書で使用される発音表記の不一致が問題として挙げられる。この表記の不一致とは、「同じ発音に対してどの表記を用いるかという記号上の問題」(小川、2002、p.389)であり、具体的には母音表記の違いを指す。今回の分類においても、現行の教科書ではいわゆる「そり舌のシュワ」音を、NCが[ə:](強勢つき)[ə:] [ə] (強勢なし)の3種類を使い分けて表記し、NC以外の5社は[ə:r] (強勢つき)[ə:r] (強勢なし)の2種類で表記していることが明らかになった。また、二重母音[iə:r]は[iə] (NC)、[eə:r]は[eə] (NC)や[ɛə:r] (TE)、[ɔə:r]は[ɔ:r] (NH・SS・TE・OW・C21)や[ɔ:] (NC)等の表記に分かれ、[ɑə:r]には[ɑ:r] (NH・SS・TE・OW・C21)、[ɑ:] (NC)のバリエーションがみられた。さらに特筆すべき事項としては、6社中NCが唯一カタカナ表記を発音記号と併用していることである。本課内や巻末の付録で英単語に添えられたカタカナ表記が、語強勢を太字で表すなどして発音記号の一種として使用されている(例 scissors [スイザズ]、ice hockey [アイス ハキ]、NC ENGLISH SERIES 1, p.114)。本稿においてはカタカナを発音記号に表記し直すことはせず、分析対象からは除外した。さらに6社中4社が使用しているイタリック体の[r][h][j] (NH・SS・TE・OW)に関しては、検定教科書間の表記の不一致が存在するだけでなく、イタリック体rの本来の意味(音の脱落の可能性)とはかけはなれた辞書・教科書での表示、および実際の教育現場における誤った理解が「混乱を起こす」こと(竹林、1996、p.295)もすでに指摘されている。本分析においては、イタリック体が学習者に対してその正確な意味を伝えていないと判断し、イタリック体をはずした記号([r][h][j])としてそれぞれを分類表に加えた。

#### 4.1.2 発音指導

では、各教科書で3年間を通してどのような「音」が発音指導の対象として提示されているのであろうか。分析の際には、単に新出語句と発音記号が併記されているところは除外し、「発音コーナー」に限定して指導ターゲットとなる音を抽出した。具体的には、1

<sup>2</sup> この表記法により、本稿において母音は、前舌母音 [i:, i, e, æ]、中舌母音 [ə, ʌ, ɔ, ɜ]、後舌母音 [u:, u, ɔ:, ɑ, ɔ:]、二重母音 [ei, ai, au, ou, oi, iə, eə, uə, ɔə, ɑə] と表記する。なお、三重母音 [eiə, aiə, auə] は分類対象に含んでいない。

年次用では巻頭や巻末のアルファベットと発音を結びつけて母音・子音に注意させるページ（単なるアルファベット紹介は除く）、また全学年においては、本課内に特別に設けられたコーナーや欄外でつづりと音の関係を提示している部分、および巻末付録で発音記号と共にターゲットとなる音の発音を扱っている部分である。注意を喚起しながらも発音記号がついていないものは、ターゲット音を記号に直したうえで表に加えた。また子音連続も指導対象として多くみられたため、その連続音を1つの音声指導対象音として扱った。

分析結果は、各教科書が3年間でどの音を発音指導対象としたかを、母音（単母音および二重母音、ただし三重母音は除く）と子音（半母音を含む）別に示す。まず、22の母音それぞれが提示されている割合（以下、カバー率）を表2-1で確認すると、最も高いのがOW（100%）、そして以下SS（95%）、NHとTE（81%）、C21（59%）、NC（50%）と続く。NCにおいては、母音はその半数のみが発音指導の対象となっている。また各教科書で共通に扱われた母音は、全ての前舌母音〔i:,i,e,æ〕、中舌母音〔ʌ〕、後舌母音〔u:,ɑ〕、二重母音〔ei,ai,ou〕であり、その他NC以外の5社が取り上げている母音は、〔əʊ〕、〔ɔ:〕、〔ɑə〕である。また逆に、指導対象から外される事の多かった母音は、〔uəʊ〕（OWのみ扱う）、〔ɑ:〕（SS・OWのみ）、〔ɔi〕（SS・OWのみ）である。

次に、24の子音についてはその提示分布を表2-2で表している。こちらも子音それぞれのカバー率順に示すと、OW（100%）、そしてTE（95%）、SS（87%）、NH（75%）、C21（58%）、NC（25%）と続いた。NCは子音でもまた、その四分の一の音のみを発音指導の対象とした。調音法別に見てみると、全6社で取り上げられているのは閉鎖音〔t,d〕、摩擦音〔s,z,f〕、そして鼻音〔n〕である。さらに指導音の極端に少なかったNCを外すと、閉鎖音〔t,d〕、各摩擦音（〔ʒ,h〕以外）、鼻音〔m,n〕、側音〔l〕、半母音〔w,r〕がNC以外の5社で共通に指導対象となっている。側音〔l〕については、どの教科書にも異音の発音（明るいLと暗いL）の違いに関する説明は無いままに両方が発音練習課題にあげられていた。また、指導対象から外される事の多かった子音は、〔ʒ〕（OWのみ扱う）、〔g〕（SS・OWのみ）である。子音連続の提示については教科書間で差が開き、SS、OWがかなり多様な子音連続のパターンを3年間で提示しているほかは、NH・NC・TE・C21は数例を示すのみである。

その他、音声のしくみをより理解しやすく生徒に伝えるために母音の口形の写真（SS、C21）や子音発音のための舌の位置の図（C21）を記載している教科書もあるが、その数は少ない。また、本課の欄外で特定の発音記号を取り上げて口形のアドバイスを与えているのはTE（ただし1・2年のみ）、付録で口形の説明をしているのはSSとC21だけである。その他の教科書では解説などは無く、単語中で下線によりターゲット音を示したり、さらにそこに発音記号が併記してあるだけのものが多い。その他は単独の音や子音連続ではないが、注意が必要な音の連続（〔ju:〕〔ŋg〕）、また発音されない文字、日本語を示しながら英語音声では不必要な母音の挿入をしない注意などの設問の工夫が各社にみられた。さらに、ミニマルペアでの発音練習はほとんど無く、SSがthen/them（2年）を、NCがsea/she（1年）を提示しているのみであった。

表 2-1：母音の提示分布

	NH	NC	SS	TE	OW	C21
i:	○	○	○	○	○	○
i	○	○	○	○	○	○
e	○	○	○	○	○	○
æ	○	○	○	○	○	○
ə	×	○	○	×	○	×
ʌ	○	○	○	○	○	○
ɚ* <sup>1</sup>	○	×	○	○	○	○
u:	○	○	○	○	○	○
u	○	×	○	○	○	×
ɔ:	○	×	○	○	○	○
ɑ	○	○	○	○	○	○
ɑ:	×	×	○	×	○	×
ei	○	○	○	○	○	○
ai	○	○	○	○	○	○
au	○	×	○	○	○	×
ou	○	○	○	○	○	○
ɔi	×	×	○	×	○	×
iə* <sup>2</sup>	○	×	○	○	○	×
eə* <sup>3</sup>	○	×	○	○	○	×
uə	×	×	×	×	○	×
ɔə* <sup>4</sup>	○	×	○	○	○	×
ɑə* <sup>5</sup>	○	×	○	○	○	○
カバー率 (%)	81	50	95	81	100	59

\* 検定教科書により異なる以下の発音表記を含む

1. 強勢つき [ə:r] [ə:] 強勢なし [ə:] [ə] [ər]
2. [iə]
3. [eə] [ɛər]
4. [ɔ:r] [ɔ:]
5. [ɑ:r] [ɑ:]

表 2-2：子音の提示分布

	NH	NC	SS	TE	OW	C21
p	×	×	○	○	○	×
b	×	×	○	○	○	×
t	○	○	○	○	○	○
d	○	○	○	○	○	○
k	○	×	○	○	○	×
g	×	×	×	○	○	×
f	○	×	○	○	○	○
v	○	×	○	○	○	○
θ	○	×	○	○	○	○
ð	○	×	○	○	○	○
s	○	○	○	○	○	○
z	○	○	○	○	○	○
ʃ	○	○	○	○	○	○
ʒ	×	×	×	×	○	×
h	○	×	×	○	○	×
tʃ	○	×	○	○	○	×
dʒ	×	×	○	○	○	×
m	○	×	○	○	○	○
n	○	○	○	○	○	○
ŋ	○	×	○	○	○	×
l	○	×	○	○	○	○
w	○	×	○	○	○	○
r	○	×	○	○	○	○
j	×	×	○	○	○	×
子音連続	a	b	c	d	e	f
カバー率 (%)	75	25	87	95	100	58

《子音連続》の詳細

- a. [ts] [hw]
- b. [ts] [dz]
- c. [dz] [ts] [ks] [pr] [dr] [gr] [br] [tr]  
[pl-] [-pl] [kl] [dl] [kw] [sw] [tw]
- d. [dz] [ts] [st]
- e. [kw] [ks] [st] [dr] [tr] [gr] [kr] [h]  
[w] [j] [pr] [br] [pl-] [-pl-] [-pl]
- f. [dr] [tr] [gr] [pr] [sp]

## 4. 2 強勢

強勢については、語・句・文の3つのレベルで分析を行った(表3参照)。

まず、語強勢では、1年生の教科書全社において発音記号の記載が本課中に無いため、スペリングに強勢記号(´または▼)が直接付けられている。2、3年生用では新出語句と発音記号が併記されているので、発音記号に強勢記号が付けられている。強勢記号の種類は、最も強い箇所を示す第1強勢(´)のみを付けているものが4社(NC・SS・TE・OW)、次に強い強勢(`)も付記しているのが2社(NH・C21)あった。また、発音を扱うコーナーなどで大小の丸印を使用して強さを表しているものも2社(SS・OW)あった。OWでは1音節の語であっても、内容語と機能語の区別なく、強勢記号(´)が付けられていた。

次に句強勢であるが、「句」とは、ここでは2語以上のフレーズ(ハイフン付きは含まない)を指し、文としての扱いではないもの(ピリオドのないもの)に限定した。全社の教科書で固有名詞や名詞連続の語句には強勢記号を付記する傾向にあるが、全てを網羅しているというわけではない。つまり、あるフレーズが新出の語句で成り立つものは全ての語の発音記号を示すと同時に句としての強勢パターンを示している。しかし、フレーズの1部の単語だけが新出である場合は、新出語のみの発音記号と強勢を示し、フレーズ全体の強勢は示していないことが多い。また、句レベルの強勢の表し方は様々で、強勢記号(´)や三角(▼)、大小の丸印、または太字で強勢のある部分に注意を喚起している。

表3 強勢の扱い

	NH	NC	SS
語強勢	(´)(`), (▼)	(´), (▼)	(´)
強弱の表し方(句・文)	大小の黒丸 小さい黒丸 太字 印なし	小さい黒丸 太字 イタリック体で 印なしで説明のみ	大小の青丸 太字 青い強勢記号
リズムの説明	1:「強いところは長めに、他は弱く短めに」 「例にならって」 2:「答えの文でいちばん強く発音される語」 3:「強いところは長めに、他は弱く短めに」	1,2:「リズムをつけて」 「強く読むところを考慮して、リズムよく」 1:「相手が一番知りたがっている情報を強調して」 2:「単語と同じリズムをもつ文」を選ぶ 3:「一息で言えるように」 「リズムに注意して」	1:「強く発音する部分に注意」 「強弱のリズムに注意」 2:「強く読む語に注意」 3:「アクセントのある箇所は強く、ゆっくり」
巻末等	特になし	3:『リズム読み』“The House that Jack Built”	2:『英語の音声』リズムの特徴



	TE	OW	C21
語強勢	( ´ )	( ´ )	( ´ ) ( ` )
強弱の表し方(句・文)	大小の黒丸	強勢記号 注意すべき語が太字(前置詞、接続詞)または下線を引く	強勢のある音節が青色
リズムの説明	1,2: 「1回目は●と・の部分に注意して聞き、2回目は後について言ってみましょう。」	1-3: 「・の部分、強く発音」(CHANTS) 3: 「前置詞、接続詞を弱く、短く」「前置詞を強く」「強く読む語をかえることによって、伝えたいことがどのように違ってくるか考え、発音」	1: 「英語は日本語と比べて、強いところと弱いところがはっきりしています。青色のところを強く、長く発音」「文の中で一番伝えたい語を強くはっきり」 2: 「2つの文を同じリズムと時間で」 3: 「haveの強さの違いに注意」
巻末等	特になし	特になし	特になし

(注) アラビア数字は学年を示す

NHとOWは比較的多くの句強勢を示しており、特に名詞連続は他の4社よりかなり多く提示されている。またSSは巻末ではあるが、『英語の音声』で語強勢の移動(Japanese → Japanese house)を「快いリズムにするために強く発音するところが変わることがあります。」(ENGLISH COURSE 2, p.100)として示している。しかし、全社において句強勢はあまり積極的には示されていない。

文強勢については、各社色々な工夫をして提示し、説明も様々である。強く読まれる箇所は黒丸や太字、色を変えるなどして表しているものが多く、イタリック体を使用(NC)したり下線を引く(OW)などで示しているものもある。文強勢の提示では、英語特有のリズムである強勢拍リズムがどのように導入されているかが注目されるだろう(表3の「リズムの説明」参照)。英語の強弱のリズムは、強勢がある音節は一般に強く長く読み、弱のリズムで読まれる音節は軽く短く読むという原則を踏まえて説明されていることが多いが、日本語との比較を示したり強弱のリズムになるよう注意喚起したりしているものは少ない。また、内容語を強く、機能語を弱く、という原則を説明しているものもなく、リズムのしくみそのものの説明もほとんどみられない。

#### 4.3 イントネーション

イントネーションについては、全ての教科書で矢印(↑, ↓)を使用し、文末のイントネーションが表されている。扱われる項目は表4の通りであるが、Yes-No疑問文、疑問詞疑問文、選択疑問文は6社全てで扱われている。付加疑問文や列挙の扱いは、それぞれ3社ずつ(付加疑問文はNC・SS・TE；列挙はNC・OW・C21)で、肯定文でも上昇調で読むと疑問を表すことが可能であるというポイントも3社(NC・TE・C21)が扱っている。

各社ともイントネーションの扱いはそれほど多くないが、巻末付録で補足的にイントネーションを取り上げているものもある。SSは巻末の『英語の音声』という発音コーナー

で肯定文、疑問文、選択疑問文の3つを取り上げ、同じ文でもイントネーションを変えることによって話し手の感情が入り、微妙な意味の違いが出ることを示している。また全社中唯一SSがこのコーナーでイントネーション・ラインを示しており、普段は強勢をおかないmyのような機能語でも大事な情報としてピッチが上がることを視覚的にラインで表している。C21も巻末の『発音のポイント』で、基本的な文の種類とイントネーションのパターンを示している。また、「親しみの気持ちを表すイントネーション」として同じ命令文でも上昇調と下降調を使い分けると、表す気持ちが違ってくると記載している。

表4 イントネーション

	NH			NC			SS			TE			OW			C21		
	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
学年																		
肯定・命令文							○	○	○		○				○			○
Yes-No 疑問文	○						○	○	○		○				○			○
疑問詞疑問文	○			○			○	○	○					○	○			○
選択疑問文	○				○				○					○	○			○
付加疑問文					○				○		○							
列挙						○										○		○
聞き返し、 繰り返し	○	○	○	○			○		○			○						
呼びかけ							○		○									○
その他							a	b	c	d		e	f					g

＜その他＞の詳細

a. See that pot? ↑

b. Don't you remember? ↑

c. ~, right? ↑

d. Oh, really? ↑

e. You mean those dots? 「ふつうの語順でも、最後を上げ調子で言うと質問になります」

f. Strong coffee!? 「気になった言葉を上げ調子で言うと驚きや疑問を表します」

g. You want to be a journalist? ↑ 「下線部から上げて言いましょう」

表5 音のつながりの扱い

	NH	NC	SS	TE	OW	C21
記号	ゝ	なし	ゝ	㇀	ゝ	ゝ
連結	1: get up 2: gave it 3: なし	1: practice it 2: use it 3: should I	1: She's an 2: on an easy 3: tell us	1: pictures of 2: take any 3: as a	1: it's a 2: Ken, and 3: if it's	1: なし 2: Not at all. 3: なし
脱落	1: went to 2: want to 3: なし	1: what time 2: なし 3: don't we	1: なし 2: なし 3: なし	1: didn't try 2: What did 3: started to	1: What time 2: went to 3: it's sunny	1: なし 2: want to 3: could do
相互 同化	1: did you 2: could you 3: don't you	1: なし 2: なし 3: would you	1: meet you 2: did you 3: could you	1: Did you 2: did you 3: なし	1: meet you 2: did you 3: did you	1: なし 2: なし 3: meet you
他の 同化	1-3: なし	1-3: なし	1-3: なし	1: enjoyed the 2: is sometimes, have/has to, about the 3: hands to, as soon	1: in the, hand that 2: in the 3: in bed, been there	1-3: なし
その他		2: do you	1: do you and see	2: stay in, buy and, did he 3: asked him, wants to, touching her	1: call me, Nice to 等 2: you go, go with, and we 等 3: Tom'll play, been to, If he 等	

## 《連結、脱落、同化の定義》

連結… 2つの単語間で前の語の語末が子音、後続語の語頭が母音（または半母音 /j/）のとき、つながって発音される現象

脱落… 2つの単語間で前の語の語末が閉鎖音、後続語の語頭が子音のとき、前の閉鎖音が聞こえにくくなる現象。または同じ子音同士が重なり、前の子音が聞こえにくくなる現象

相互同化… 2つの単語間で前の語の語末の音と後続語の語頭の音が互いに影響し合っって別の1つの音になる現象

その他の同化… 2つの単語間で前の語の語末の音が後続語の語頭の音の影響を受けて別の音になる現象

## 4. 4 単語間の音のつながり

音のつながりについては、4社（NH・SS・OW・C21）でスラー（ゝ）、TEが㇀記号を使用している。NCでは記号を使用せず、「1つ単語のように」、「ひとつのかたまりのように」、「ひとまとまりにして」などの言葉で説明を付記している。NH・SS・OW・C21では、「音のつながり」は「音の変化」とも呼ばれ、「音の変化とつながりに注意して」のように併記されていることもあり、厳密に区別して使われていない。扱われている音のつながりを連結、脱落、同化の3種類に分けて調べたところ、どの教科書でも3年間のうちに3種類の音のつながりを必ず目にするようになる。ただ、音のつながりを取り扱う分量には教科書間でかなりの差があり、C21は扱う項目が最も少ない。

音のつながりの説明については、ほとんどの教科書で詳しい説明はなく、NCとC21が1つの現象について1行以内の短い解説を付けている程度である。それらも音の現象が一般的にこのような場合に起きる、というものではなく、個々のケースについて説明すると

いう形式である。たとえば、NC では What time の説明を、「2つのtは1つにつなげて発音しよう」(ENGLISH SERIES 1, p.64) と説明し、C21 では could do の説明を、「最初の [d] は口の形だけで、次の [d] を発音しましょう」(ENGLISH COURSE 3, p.8) と説明している。同化については、相互同化以外の同化(逆行同化)にスラーを付けるなどして注目させているが、それらがどんな音に変化するかを発音記号で示すまでには至らない。また、いわゆる本稿で定義した3つの音変化(表5欄外)ではなく、機能語を弱形で読むことにより、素早く読ませたい箇所などにも注意を喚起している(NC・SS・TE・OW)。

表5は、各社各学年で出てくる音のつながりを例に挙げて分類している。本稿で扱う連結、脱落、同化の定義を表の下に付記しており、「その他」の欄にはその定義にあてはまらないものを数例のみ記載している。

#### 4.5 ポーズ

ポーズとは、意味のまとまりごとに線を入れて区切る、いわゆる「意味グループごとの区切り」である。適切な場所にポーズをおいて発音できるということは、文の構造が理解でき、英文の意味が理解できるということである。全社で1年次の教科書にはポーズの扱いがなく、2年次以降で縦線 (|)、斜線 (/)、▼によって4社(NH・SS・OW・C21)がポーズを表している。NCでは「次の文を意味の切れ目ごとに区切ってみよう」という問題形式で意味のまとまりを考えさせているが、答えは教科書に示されていない。また、TEではポーズは全く扱われていなかった。

ポーズについての記述に関しては、全社において分析対象とした今回の音声学習項目の中で記載が最も少なかったといえる。

#### 4.6 Oral Interpretation 指導

Oral Interpretation (以下OIとする)とは、元々は文学作品などを用いて、「1つの作品(ないしはその抜粋)の意味を自分なりに解釈し、作者になりかわって音声表現する作業」(近江、1984、p.3)であり、教科書内でのOI音声指導にも「意味や感情に合致した音声をどのように作らせるか」(浅野、2005、p.244)という視点を必要とする。つまり発話者、その受け手、発話時の状況の明確な定義付けと解釈が要求されるのである。よって本稿で取り上げる教科書における「OI指導」の決定要素は、単に音読するのではなく、その場面に応じた感情を考えて言葉を発するような指示をしているかどうかであり、1)「気持ちをこめて・感情をこめて」(SS他)のような発話者の感情面の解釈についての説明があるもの、2)「聞きやすいスピードで」(TE)のように発音時に聞き手も意識した voice control を指導するもの、3)「聞き手を引きつけましょう」(TE)のように聞き手があってこそその発話であることを再認識させる指示のあるもの、の3点の有無を基準として該当部分を抽出した。ダイアログを特別な指示もなくロールプレイさせたり、単に「スピーチをしましょう」というようなものは除外した。表6がその結果である。

表6 OI 指導に関するコーナー

	抽出場所と内容
NH	“Sound Box” 「2通りの言い方で」(2年) 「せりふに続く部分は、低い調子で」(ナレーション部分のこと)(3年) “Multi Plus” 「気持ちを込めて朗読」(3年) 「動作をつけてスキットを演じ」(3年)
NC	☺印「感情をこめて強く」(1年) 「アリスとハンプティになったつもりで」(1年) 「感情をこめて」(2年)
SS	『発音に注意しよう』 「気持ちをこめて」(驚き・関心・失望・誘いに乗るなどの状況が示される)(1年)
TE	🗣️印「自分の気持ちを伝える」(2年) 「スピーチや発表では、聞き手に問いかけたりしながら関心をひきつけます」(2年) “In Your Words” 「みんなに聞こえるように大きな声で語りかけましょう」(1年) 「聞きやすいスピードで」 「リズムやイントネーションを意識して聞き手を引きつけましょう」(2年) 「リズムやイントネーションを意識しながら聞きやすいスピードではっきりと」(3年)
OW	Unitの最初のページの10 GOALS 「感情を込めてスキットを演じることが」(1年) 「話し手の気持ちになり、感情をこめて音読すること」(2年) “Activity” 「～になったつもりで」(1年)(2年)
C21	『発音のポイント』 「親しみの気持ちを表すイントネーション」(疑問詞疑問文や命令文を上昇イントネーションで発音する)(1年) ⑤印「感情をこめて読みましょう」(疲れている・誇らしい気持ち)(2年) (好意的・退屈している・疲れている・応援している)(2年) 🗣️印「気持ちを込めていましょう」(What, How-!の感嘆文)(3年)

OI 指導を扱っている発音コーナーの種類を調べると、NH・TE・OW・C21は2種類以上のコーナーを用いている。また、取り上げられる頻度で見ると、多いものではTEが1年次のみならず2・3年次でも「音読する」「スピーチをする」というコーナーを設けており、指導表現も「聞き手」「みんなに」「聞きやすいスピード」「リズムやイントネーション」といったOI指導の目的にかなったものが多く提示されている。また反対に頻度の極端に少ないものはSSで、1年の本課が修了した時点で1度OI指導を提示しているだけである。C21は3年間でOIを扱うコーナーが学年ごとに異なっているのが特徴的である。

## 5. 考察：現状と問題点

以上、音声指導6項目について分析をすると、大学の音声学で扱う基礎的な項目が中学校検定教科書でかなり提示されている現状がわかる。ただし、今回の調査により露呈した問題点は、教科書間の音声指導項目における重点の置き方や記号の使用などの差異が非常に大きいということである。どの教科書を3年間使用するかにより、学習者の既習音の範囲や、音声のしくみの知識の差が大きく開くことは想像に難くない。以下に項目別の問題点を指摘したい。

まず、発音記号については、一改訂前の教科書に対する小川(2002)の指摘と同様に、本稿で分析した平成17年検定済の教科書間でも不一致がみられた。また、音声表記としてのカタカナ使用が採択率第2位のNCにおいてみられた。採択率が高いことの意義が、

本稿でも中條他(2008)と同じく「多くの学習者が会おう可能性の高い」(p.69)と理解すると、学習者への影響は非常に大きいであろう。NCはカタカナ表記と連動するように、発音に関する指導部分も他社と比較すると目立って少ない。発音記号をできるだけ提示せず、また使用したとしても極めて細かな種類を示していることなどから、NCが記号や発音練習を通して生徒に音を定着させようとする印象は受けにくい。また、発音指導に関して特色のある教科書はTEで、学年によって母音指導と子音指導を分けていることである。表2-1、2-2は3年間に指導する音を累積しているため表面上ではわからないが、実際は1年次で[ɜ]以外の全子音に焦点をあて、2・3年次では母音指導と若干の子音を復習できるように構成されている。母音に関しては、2学年を通して繰り返して同じ音が扱われ、定着を目標にしているのがうかがわれる反面、子音の反復提示はかなり少なめである。さらに、個々の音に対する発音アドバイスの有無から全社を見ると、アドバイス有り(SS・TE・C21)と無し(NH・NC・OW)の2つに分かれた。アドバイスが書かれていない下線付きの単語は(たとえ発音記号が添えられてあったとしても)どのような音がターゲットとされ、どのように発音すべきなのかを、教員の説明なしには生徒は理解できない。またこれらは欄外や本課外に置かれている場合が多く、その扱いが教員に一任されており、触れられずに終わってしまう可能性も大きい。せつかく音声のしくみを提示しているのなら、口形や発音のアドバイスを必ず添えるべきである。そうすればたとえ欄外であっても「どう発音するのか」が生徒の視野に入り、巻末資料であっても自分で読みきっかけを与えることになる。それだけで扱う音の発音学習を促すチャンスは、飛躍的に大きくなるはずである。

強勢については、語強勢では、最も強い部分の強勢を表す(´または▼)のにとどまっているのが6社中4社、次に強い強勢(`)を扱っているのは2社のみであった。基礎のレベルでは最も強いところがわかればよい、または次に強い強勢を示すことで混乱するのを避けるというねらいがあると推測される。句強勢は、全ての教科書であまり積極的に示されておらず、固有名詞や名詞連続の句以外にはほとんど強勢は付けられていない。しかし、句レベルでもどの部分が強く読まれるのかという意識付けは常に必要であり、それがさらに文レベルの強勢につながっていくものと思われる。文強勢については、文中でどの部分が強くなるかを丸印や太字などで示している。ただ、文中のどの語が強くなり、それは英語のどのようなリズムを保つために強く読まれるか、などの説明に及ぶところは少ない。示された文以外でも強く読まれるところがわかるようなヒントが必要ではないだろうか。

イントネーションについては、比較的扱いは軽く、特に付加疑問文や列挙の文については、3年間のうちに1度だけ言及するか、または全く取り扱っていない教科書もある。付加疑問文は、実際の会話の中ではほとんどの場合に下降調で読まれ、同意を求める時に使われるが、大学の音声学の授業でその文を扱うと、多くの学生が文末を上昇調で読む。疑問詞疑問文にも同じことが言えるが、どちらの文も文末の疑問符(?)を見ただけで反射的に文末を上昇イントネーションで読むなど、文末を下降イントネーションで読むことが

定着していない。3年間毎年同じことを繰り返し行なって定着させることは必要なことであるが、今回の分析では入門期の音声指導においてイントネーションを扱う頻度が少ないことが明らかになった。

音のつながりについては、リズムと音のつながりを同時に提示している教科書があり、興味深い。TE と OW では常に両方を示して練習を促しているコーナーがあり、強勢拍リズムで読むことにより、音もつながって発音されることが視覚的に理解しやすい。ただ、気になる点はやはりその規則やしぐみを表せているかどうかである。どんな場合に連結され、どんな場合に脱落が起きるのかなどの理論的な説明は教員に任されているのだろうか。どのように発音するかのアドバイスはあるが、別のパターンで出てきた際に応用できるような力をつけるのはなかなか難しいだろう。また、機能語の弱形を含む音の変化と、いわゆる連結・脱落・同化が同じ記号で表されていることも問題である。素早く読ませようとする意図はうかがえるが、生徒にはそのルールを読み取るのは困難であり、よって定着する率は低くなるであろう。

ポーズに関しては、長い文の使用がない1年次ではどの教科書にも扱いがなく、記載があるのは2、3年次であるが、その頻度もかなり低い。ある程度の長さのある文に自分でポーズを入れる問題形式もあるが、ほとんどが最初からポーズの場所を示しており、生徒に考えさせる形式ではない。どんなところにポーズを入れるのか、というしくみも示されおらず、「意味グループ」を理解し声に出して読むような練習の機会が不足していることが指摘できる。

OI 指導に関しては、各社とも状況を理解した音声表現を生徒に考えさせる設問を設けているが、その取り扱いの量がかなり違う。このOI 音声指導項目の設置は、現行の学習指導要領（第9節）「ウ 読むこと」の中の「(イ) 書かれた内容を考えながら黙読したり、その内容が表現されるように音読すること。」(中学校)という記述の実践である。感情をこめて外国語で表現することは、中学生にとっては新しいチャレンジとなり、相手に向けて伝えようとすることによって、今回の分析の他の5項目にも好ましい影響がある。3年間に1度きりしか取り扱われなかったり(SS)、取り扱われるコーナーに統一性がない(C21)様では応急処置的な感をまぬがれなく、残念である。

## 6. 今後の課題

今回の中学校英語検定教科書分析を総括的に見ると、各教科書内に発音・音声のしくみが多項目に渡って示されていることが明らかになった。平成22年度の大学新入生による中学・高校での理論に基づいた発音練習の体験なども、それらの指導項目の存在から証明された。大学の英語音声学で学ぶ理論の基礎が既に多くの中学校検定教科書の中に提示されている時代が来ているということである。しかし同時に、その提示の量や方法などインプットの差異が本稿の調査において見られ、どの教科書を使用して音声教育を受けてきたのかという学習者への影響が大きな問題となることを指摘してきた。とすれば、今後の課

題としては、担当教員の裁量によりさらに左右されるその音声指導項目の活用実態と学習者への影響であろう。数多くの音声学習項目が提示されているのに取り上げられなかったり、付随的に扱われたりすることは、学習者がそこに価値を見出しにくくなり、それがなぜ存在するのかという矛盾にも常にさらされていることになる。牧野(2005)が、系統立った発音指導により高校生の発音を飛躍的に上達させた経験から、「つまみ食いの的に教わった結果」(p.16)、後年大学生になっても自己流の発音や理論解釈から抜けられない学生の問題点を指摘している。中学校においても同じことが言えるだろう。様々な音声指導項目の提示に大きな期待を寄せると共に、実際の系統立った丁寧な指導を切に望むところである。今回は中学校の検定教科書のみを取り上げ、発音と音声のしぐみに焦点をあてたが、今後は高校検定教科書へ視野を広げ、中高の連携の視点からさらに音声指導部分の分析を進めたいと考えている。また教科書分析だけでは見えない実際の指導状況をアンケート調査により明らかにすることも必要であると考え。

## 謝辞

本稿の執筆にあたり、丁寧なご指導をいただいた大阪大学の米田信子先生に感謝の意を表したい。

## 引用参考文献

- 有本純(2002)「英語の発音指導における教材の在り方」『関西国際大学研究紀要』3,1-13.
- 浅野亨三(2005)「Oral Interpretation 指導の研究(1) - 自立的な Oral Interpreter へ」『南山短期大学紀要』33,243-257.
- 浅野亨三(2007)「短期大学の英語教育」『南山短期大学紀要』35,233-251.
- Celce-Murcia, M., D. Brinton & J. Goodwin (1996). *Teaching pronunciation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 森住衛、高橋貞雄、見上晃、鳥飼慎一郎、伊部哲、大野秀樹ほか(2007)『わが国の外国語・英語教育に関する実態調査の総合的研究-学生編』東京: 大学英語教育学会実態調査委員会
- 後藤善久(1997)「異文化コミュニケーション能力育成からみた高校英語教科書分析」『札幌大学女子短期大学部紀要』29,17-28.
- 林千賀(2010)「日本の中学校英語教科書分析-異文化コミュニケーション能力育成の観点から-」『成蹊人文研究』18,43-52.
- 平田和人ほか(2008)『中学校新学習指導要領の展開 外国語科英語編』東京: 明治図書
- 日吉美晴(1998)「小中連携カリキュラムのための中学校英語教科書分析」『日本児童英語教育学会研究紀要』17,17-26.
- 時事通信社(2009)「2010年度中学校教科書採択状況: 文科省まとめ」『内外教育』5960,2-4.
- 甲斐順(2004)「中学校英語教科書比較研究-語彙の頻度分析を通じて」『言語表現研究』20,71-85.
- 金田尚子(2005)「日本の中学校英語教科書にみる異文化理解-題材の観点からの教科書分析-」『英語英米文学研究』33,129-149.
- Kenworthy, J. (1987). *Teaching English pronunciation*. London: Longman.
- 菊池武(2007)「発音と日本人としての identity に関する一考察」『独協大学英語研究』63,1-20.



- 菊池武 (2009) 「発音と英語力」『独協大学外国語教育研究』27,59-86.
- 菊池武 (2010) 「発音指導に関しての高等学校英語教員の見解」『独協大学外国語教育研究』28,69-85.
- 小関文典 (2001) 「改訂教科書評価のための現行教科書再点検」『東北英語教育学会研究紀要』21, 101-107.
- 牧野武彦 (2005) 「なぜ生徒は発音を間違えるか?」『英語教育』大修館書店,54 (10),15-17.
- 三浦弘 (1995) 「日本人学習者のための英語音声指導」『研究紀要』言語文化研究会,5,127-140.
- 三浦弘 (2000) 「英語発音記号指導の2つの要因 ー日本語音声の認識と発音記号の利用ー」『専修大学外国語教育論集』28,33-44.
- 文部省 (1998) 『中学校学習指導要領』東京：大蔵省印刷局
- 中條清美・西垣知佳子・長谷川修治・内山将夫 (2008) 「「ゆとり教育」時代の高校教科書語彙を考えるー1980年代と2000年代の高校英語教科書語彙の比較分析からの考察」『英語コーパス研究』15,57-79.
- 中西のりこ (2008a) 「英語発音学習に対する学生の意欲と動機付け」関西国際大学コミュニケーション研究所 コミュニケーション研究叢書 6,48-57.
- 中西のりこ (2008b) 「英語を専門としない学生の発音学習に対する意識 - World Englishes 時代に求められる英語発音」『神戸学院大学経営学論集』5 (1),1-15.
- 中岡典子 (1998) 「入門期の教科書における音声指導の分析と提案」『東京立正女子短期大学紀要』26,1-33.
- 小川直義 (1999) 「中学英語教科書における文強勢について」『英語音声学会第4回予稿集』51-60.
- 小川直義 (2002) 「教育的発音表記について」『英語音声学』(5),389-403.
- 及川賢 (2007) 「検定教科書(外国語科(英語))を通してみた中高間のギャップ」『埼玉大学紀要』教育学部 56 (2),73-80.
- 近江誠 (1984) 『オーラル・インタープリテーション入門』東京：大修館書店
- 近江誠 (1996) 『英語コミュニケーションの理論と実際ースピーチ学からの提言』東京：研究社出版
- 近江誠 (2009) 「オーラル・インタープリテーションとは何か? 何のためにするのか?」『南山短期大学紀要』37,171-198.
- 柴田雄介、横山志保、多良静也 (2006) 「英語発音指導に関する教員の実態調査」『日本英語音声学会第六回九州沖縄四国支部研究大会 (大会記念論集)』49-55.
- 柴田雄介、横山志保、多良静也 (2008) 「英語発音指導に関する実態調査」『四国英語教育学会紀要』28,47-58.
- 竹林滋 (1996) 『英語音声学』東京：研究社
- 田邊祐司、三浦弘 (2000) 「発音指導の新たな枠組み〜コミュニケーションアプローチの観点から」『英語音声学』(3),609-630.
- 田邊祐司、小山敬一、中野香 (1998) 「英語発音入力・練習法に関する一考察：教科書分析を通して」A constructive examination of English pronunciation work: The case of junior high school English textbooks. 『語学ラボラトリー学会第38回全国研究大会発表論文集』52-55.
- 田邊祐司、中野香 (1999) A constructive examination of English pronunciation work: The case of college pron-related textbooks. 『山陽論叢』6,65-86.
- 多良静也、大嶋秀樹 (2010) 「英語の音声、発音に関する学生の意識について：高等専門学校における小規模質問紙調査から」『鳴門英語研究』22,67-78.
- 東後勝明、御園和夫 (2009) 『英語発音指導マニュアル』東京：北星堂

大阪女学院大学紀要 7号(2010)

山本久仁子(1998)「中学校英語教科書における発音指導に関する考察」『OLIVA』関東学院大学英語  
英米文学会, 5, 137-153.

中学校英語検定教科書(平成17年検定済)

『NEW HORIZON English Course 1,2,3』	東京：東京書籍
『NEW CROWN ENGLISH SERIES 1,2,3』	東京：三省堂
『SUNSHINE ENGLISH COURSE 1,2,3』	東京：開隆堂
『TOTAL ENGLISH 1,2,3』	東京：学校図書
『ONE WORLD English Course 1,2,3』	東京：教育出版
『COLUMBUS 21 ENGLISH COURSE 1,2,3』	東京：光村図書